

茨城県土浦市におけるレンコン栽培 ——農家によるハス田の認識と収穫時期に着目して*——

原 将 也**

本稿では茨城県土浦市において、レンコン農家によるハス田の環境認識とレンコンの収穫時期に着目してレンコンの栽培方法を詳述し、土浦市が日本最大のレンコン栽培地として発展し、現在まで維持されている要因について明らかにしている。同市では、高度経済成長期の東京都市圏拡大にともなうレンコンの産地移動と1970年の米の減反政策をきっかけに、イネからレンコンへの転作が起きた。霞ヶ浦湖岸の強湿田が、レンコンの生育に適していたのである。レンコン農家は、作土層の深さからハス田を区別している。作土層が浅い田では、レンコンの表面が傷つく前に早めに収穫する。深い田では良質なレンコンが生育し、年末に収穫される。農家は、ハス田の作土層の深さに応じてレンコンの収穫時期を調整し、レンコンを出荷する。土浦市では、個々の農家がハス田とレンコンの特性、市場や消費者の要求を把握し、ハス田の環境を生かした収穫戦略を展開している。

【キーワード】 1 レンコン 2 作土層 3 栽培技術 4 霞ヶ浦 5 茨城県土浦市

I はじめに

ハス (*Nelumbo nucifera*) の地下茎であるレンコンは、古くから食材として利用されている。中国では、紀元前300年にはハスが利用されていた記録が残っている。レンコンは煮食または生食されるほか、ハスの葉は蒸肉料理の包被材料として使われ、ハスの実は生食されたり、糖果として利用されたりしていた (南川, 2004)。日本では713年、天明天皇の詔によって編纂された『常陸国風土記』の香島郡の条、『肥前国風土記』の高来郡たかくのこおりひじわいけ土菌池の条に、食材や生薬としてレンコンを利用していたことが記されている (秋本校注, 1958)。古くから利用されているハスであるが、原産地は明らかではない。ハスの原産地は中国やインドとする説が有力である。ハスが日本に渡来した詳しい時期や経路も、いまだ不明である (三浦, 2004; 南川, 2004)。

日本では、ハスの茎の端まで穴が通っていることから、レンコンは「見通しがいい」「先が見える」と

言われ、縁起の良い食材とされている。レンコンは、おせち料理をはじめとしたハレの席で食される (大矢編, 2009)。レンコンを使用した料理としては、煮しめやきんぴら、サラダなどを挙げることができる。レンコンは古くから利用され、一般家庭にとっても身近な食材である。しかしその栽培地域は特定の地域に限られ、レンコンはほかの農作物に比べて生産量が少なく、全国的にはマイナークロップとして位置づけられる。レンコンの栽培技術は、農家の栽培実践が先導するかたちで編み出され、それをもとにして栽培暦や指針が作成されている (沢田, 2010)。

日本におけるレンコン生産地の上位3県は茨城県と徳島県、佐賀県である。2017年における全国の収穫量は61,500tである。そのうち茨城県が29,500t、徳島県が7,060t、佐賀県が6,510tであり、上位3県が全国の生産量の70%を占める (総務省統計局ホームページ)。茨城県のなかでも、土浦市のレンコン生産量が最大である。2006年には8,960tである (土浦市議会事務局編, 2009)。2018年現在においても、同市は日

* 本稿の内容は、2010年度に首都大学東京に提出した卒業論文を大幅に加筆・修正したものである。

**立正大学

本最大のレンコン栽培地域である。

江戸時代には、レンコンがひろく食用として栽培されるようになっていた。当時のレンコン栽培地域は、江戸城下や江戸近郊の舟運条件のよい地域であった。明治時代には、東京府の南葛飾郡を中心とした沖積低地帯が主要なレンコン産地であった（元木、1981）。高度経済成長期の東京都市圏の拡大にもなって、レンコン栽培地は郊外に移行した（手塚、1983）。レンコンの産地は東京都内から千葉県、茨城県霞ヶ浦周辺に移ったのである。

土浦市では、明治時代に地元のハス問屋が活躍し、霞ヶ浦湖岸でレンコン栽培がはじまっている（元木、1981）。それ以降レンコン栽培がつづいている。1970年の米の減反政策によって、イネからの転作が起こり、レンコンの作付面積と生産量が急増した（元木、1981；田野、1983）。東京を中心とした首都圏拡大による産地移動と米の減反政策がきっかけとなり、茨城県土浦市においてレンコン栽培が盛んになった。

さらに霞ヶ浦湖岸にひろがる強湿田は、イネには不適であるが、レンコンには適していた。土地条件もレンコン産地としての発展に寄与している（田野、1983）。それまで確立されていなかったレンコンの栽培技術が、土浦市では個々の農家によって蓄積され、それが産地としての発展につながったと指摘されている（田野、2004）。レンコンの栽培地域が霞ヶ浦湖岸に移行し、土浦市がレンコン栽培地として発展してきた経緯について、社会条件や地理条件、土地条件から明らかにされている。

本稿では、これまでの研究で指摘されたレンコンの産地形成にかかわる議論をふまえながら、レンコン農家が実践しているレンコン栽培の分析を通して、現在まで土浦市がレンコンの一大産地として維持されてきた要因を明らかにする。具体的には、レンコン農家によるハス田の認識とレンコンの収穫時期に着目する。本稿ではまず、農家が実践するレンコンの栽培方法を詳述する。農家がハス田の環境を把握

する際に言及する作土層の深さに着目し、レンコンの収穫時期とあわせて検討することで、農家の収穫戦略を分析する。

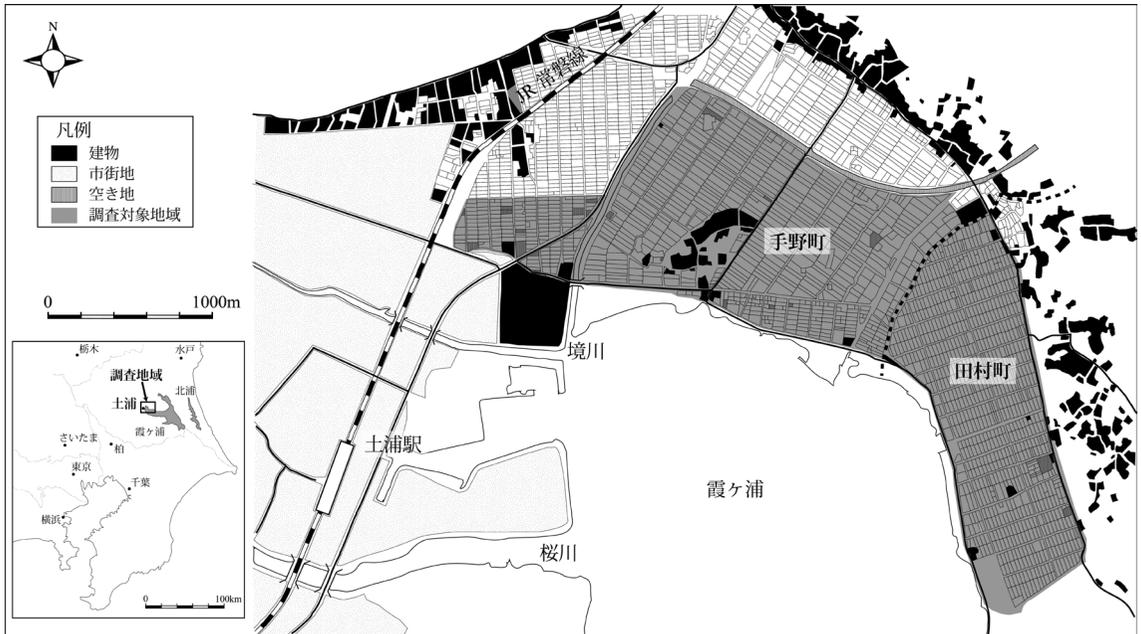
II 研究方法と調査地概要

本稿では、日本最大のレンコン栽培地である土浦市のなかでも、霞ヶ浦湖岸に位置する手野町と田村町を取り上げる（第1図）。両町のハス田を対象として、作土層の深さとレンコンの収穫時期について調査している。ハス田の作土層の深さについては、2010年12月4日と11日に調査し、測定棒をハス田の中央部に挿し、基底部に着いたときの深さを記録した。2か所のハス田において、10cm間隔で作土層の深さおよび水深を記録し、断面図を作成している。レンコンの収穫状況の調査は2010年10月9日、10月31日、11月13日、11月27日、12月12日、2011年1月3日に、レンコンの収穫がはじまっているハス田を確認した。

また2010年7月から10月にかけて、レンコンを栽培する田村町のA農家において、筆者がレンコン栽培に従事しながらレンコンの栽培方法を調査する参与観察をおこなった。1955年ごろ、A氏の父親が隣村からレンコンを分けてもらい、レンコン栽培をはじめた。2010年には60代のA氏、50代のA氏の妻と中国人研修生¹⁾の3人がレンコン栽培に従事する。

土浦市の総面積122.89km²のうち約34% (41.33km²) が農業用地である（土浦市総務部総務課総務統計係編、2017）。2015年における土浦市の農家戸数は1,195戸、農家人口は4,511人である。そのうちレンコンを栽培して販売する農家は、232戸である（土浦市総務部総務課総務統計係、2017）。土浦市ではレンコンが主力の農産物である。「霞ヶ浦レンコン」というブランドが確立され、その品質は他地域産レンコンと比べ、高品質であると評される。

本稿で調査対象とした手野町と田村町では、土浦



第1図 調査対象地域

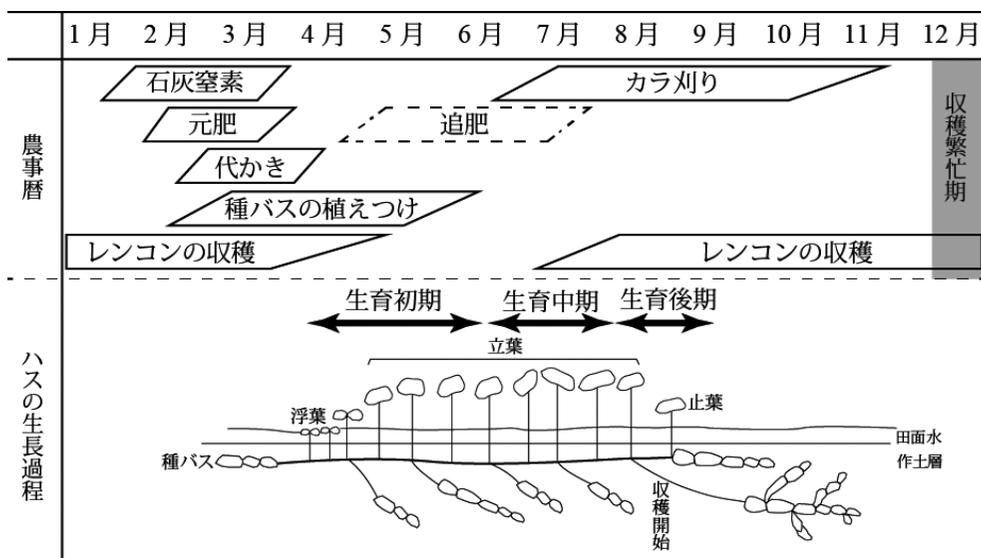
市のなかでも先駆的にレンコンが栽培されている。これら2町で、土浦市全体のレンコン作付面積の約70%を占めている。霞ヶ浦の低湿な湖岸低地にハス田が集中している。とくに田村町の土地条件は強湿田であり、第二次世界大戦前には頻繁に波浪による冠水被害を経験し、早くから耕地改良事業が進められた(田野, 1983)。各農家が、強湿田にはイネよりもレンコンが有利であることに着目し、レンコン栽培が本格的にはじまった。

田村町のハス田の多くは、10アール(以下、a)(1反)の区画である。1920~1924年に耕地整理事業が実施され、それが現在まで残されている(田野, 2004)。当時の耕地整理事業では、牛耕や肥料・収穫物の運搬を前提とした10a区画湿田が整備された。それに対し、高度経済成長期の土地改良は、機械化にともなう30a区画の乾田整備であった(広田, 1999)。多くの農業機械を使用するイネの栽培にとって、10a区画の湿田は時代遅れであった。労働集約的でほとんど機械を使わないレンコン栽培にとって、

10a区画のほうが作業効率の高いハス田になった。

レンコンはハス科ハス属ハスの地下茎である。ハスは東洋産のアジアハス(*Nelumbo nucifera*)とアメリカ産のキバナハス(*Nelumbo lutea*)に分類される(阪本, 1977; 豊田, 1981; 三浦, 2004)。レンコンとして地下茎が利用されるハスは、アジアハスのみである。ハスは高温多日照を好み、気温が25~30℃で生育が盛んになる(沢田, 2010)。ハスの生育温度の限界は約15℃である。レンコンの栽培適地は、15℃以上の月平均気温が6か月以上つづく地域である(南川, 1963)。

ハスは種バスを植えてつけて栽培される。4~5月に種バスを植えつけ、6月下旬ごろまでには浮葉と立葉2~3枚が出葉する(第2図)。葉が出はじめた6月下旬~8月上旬には、地上部が最も生長する。8月上旬以降には地下茎が肥大しはじめ、レンコンとして収穫できるまで生長する。ハスの地下茎は、節をつくりながら伸長して分岐する。肥大化する部分は地下茎の先端であり、分岐および肥大が終わる



第2図 レンコン栽培の農事暦とハスの生長過程
 資料：現地調査および沢田（2010）をもとに筆者作成。

と、地下茎全体は手のひらを広げたような形になる。ハスの茎には通気孔があり、この穴を通じてガス交換がおこなわれる（南川, 1963, 2004；沢田, 2010）。

Ⅲ レンコンの栽培システム

4月に種バスを植えつけ、早ければ7月ごろからレンコンを収穫することができる。一度肥大したレンコンは、地中に残しておくことができ、翌年に種バスを植えつける前まで収穫しつづけることができる。レンコンの栽培方法には露地栽培とトンネル栽培、ハウス栽培の3種類がある。トンネル栽培とハウス栽培には、室温を上げてハスの生長を促進し、収穫時期を早める効果がある。収穫時期を早めることで、市場価格が高い時期に出荷できるが、設備投資のコストも高くなる。土浦市では多くの農家が露地栽培をおこなっている。

レンコン農家は2月ごろ、収穫が終了したハス田に石灰窒素を投入する。その後3月中旬までに元肥

として化学肥料を入れ、^し代かきという耕起作業をおこなう。A氏は元肥とともに、緩効性の有機肥料として、魚粉と米ぬかの配合肥料を投入している。A氏によると、ハス田1枚²⁾(平均約10a)あたり元肥(20kg)を6袋、有機肥料(20kg)を10袋ほど投入するという。代かき後の4月以降に種バスを植えつける。種バスは、先端が斜め下を向くよう植えつけられる。種バスを加工することはなく、数節がつながったまま植えつけている。

A氏は、良質な種バスは大きく肥えて、形がまっすぐであると話す。大きく肥大した種バスは、生長するために必要な栄養分を多く蓄えている。形が曲がっていると、地下茎が予期せぬ方向へ伸長し、他のレンコンとぶつかり、良好に肥大しない可能性がある。

元肥の効果が切れる5～6月に追肥する。しかし、農家によって施肥に対する考え方が異なり、施肥の回数やタイミングはさまざまである。A氏は追肥しないですむよう、元肥とともに緩効性の有機肥料を

投入する。分解の遅い有機肥料を使用することで、レンコンが形成される時期に養分を供給することができるという考え方に基づいている。A氏は、手間をかけて何度も追肥するよりも、有機肥料を使用する方が効率的であると話す。

施肥が終了すると、カラ刈りというハスの茎葉を倒す作業をおこなう。茎葉を倒して枯らすことで、肥大茎への酸素供給を断つことができる。そうすると、酸化鉄由来の赤シブと呼ばれる褐色の渋が抜け、表面が白色になる（沢田，2010：106-107）。赤シブがついた状態でも品質には問題ないが、見た目が悪く、出荷価格が下がってしまう。

ガゴ車輪付き管理機を用いてカラ刈りをおこなう。すべての茎葉が倒れるよう、ハス田の外側から内側に向かって渦巻状に刈る。カラ刈りは収穫の一週間前を目安に実施され、カラ刈り後には完全に茎葉が枯れたことを確認し、レンコンを収穫し始める。カラ刈りは、茎葉が自然に枯れる10月中旬ごろまでおこなわれる。自然に茎葉が枯れる冬季には、カラ刈りは実施されない。

レンコンの収穫は、7月下旬ごろからはじまる。10月ごろまでレンコンは肥大しつづける。A氏は、8～9月に収穫するレンコンは完全に肥大しておらず、表面の肌が白く、やわらかいものが多いと話す。レンコンの収穫方法には、手掘りと水掘りの2通りある。手掘りは徳島県をはじめとする西日本でおこなわれ、ハス田の水をすべて抜き、鍬や機械で土を掘り起こしながら収穫する（沢田，2010：110-111）。一方、茨城県を中心とした東日本では、ハス田の水を抜かずにポンプを用いる水掘りが主流である。土浦市では水掘りがおこなわれ、水を勢いよく噴射するエンジンポンプを用いる。ポンプは定置ではなく、トラックに載せて掘り取りをおこなうハス田に移動させる。

レンコンを掘り取るときには、農家はウェットスーツを着てハス田に入る。ポンプを片手にもつが、ポ

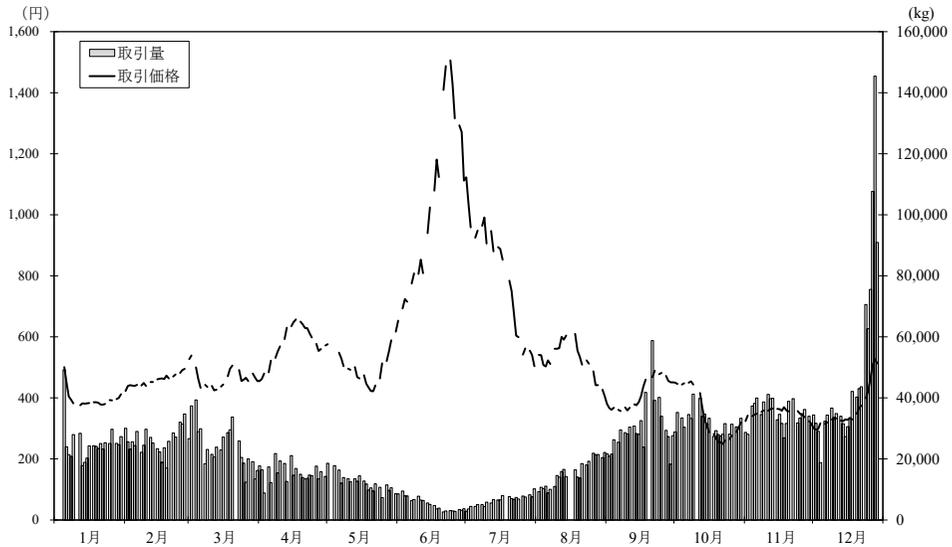
ンプの水圧は高く、手を離すとその勢いでポンプが飛び、制御不能となる。収穫作業は非常に危険である。作業中には、必ずポンプを水中で下向きに沈めたままもちつづけなければならない。片手にポンプをもって泥をよけながら、もう一方の手でレンコンを探る（写真1）。A氏は掘り取りには経験のほか、土中のレンコンを探るときの手の感覚が重要だと語る。すなわちレンコンを手で探るとき、レンコンに傷をつけないよう、何度も触れることなく、レンコンの形状を判断してポンプを操る技術が必要で



写真1 水掘りによるレンコンの収穫
掘り取ったレンコンを水面に浮かべたソリに載せ、ハス田わきの作業場まで運ぶ。
(2010年10月、筆者撮影)



写真2 収穫したレンコンの洗浄と成型
レンコンの表面についた泥を洗い、つなぎ目の細根をそぎ落とす。
(2010年10月、筆者撮影)



第3図 東京区部の青果市場における茨城県産レンコンの平均取引価格と取引量（2010年）
資料：独立行政法人農畜産業振興機構ホームページをもとに筆者作成。

ある。

レンコンを掘り取る際には、ポンプで周りの泥を除けながら丁寧に掘り起こす。レンコンに直接ポンプの水流をあてないよう、常にポンプを動かしながら中腰で作業する。ポンプから噴射される水がレンコンにあたると、レンコンが「冷えて」青く変色してしまい、出荷の際に傷物として取り扱われるという。

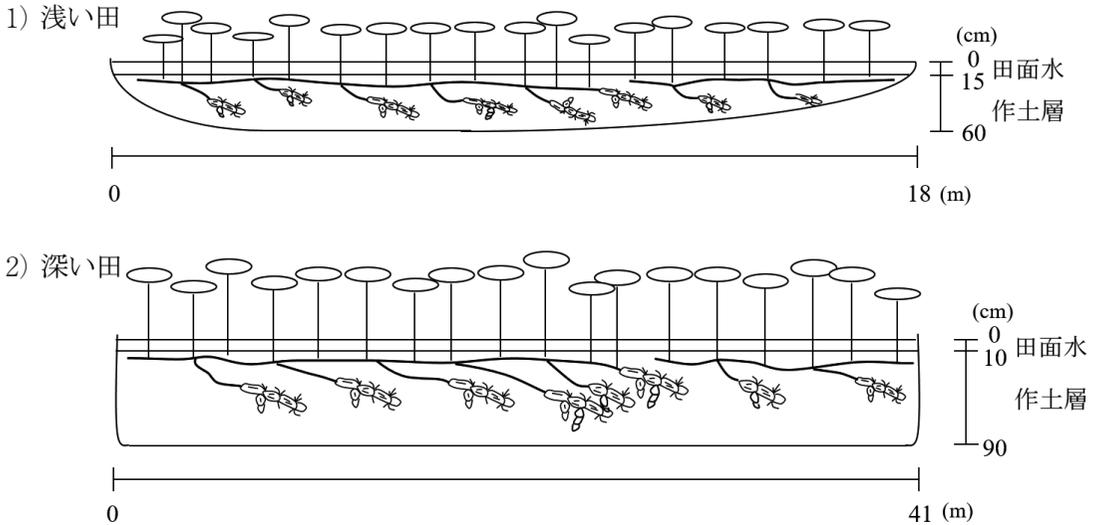
収穫したレンコンは、包丁を用いて親レンコンから子レンコンを切り離し、1本ずつに分けられる（写真2）。1節が5cmに満たない小さすぎるレンコンは出荷されない。収穫後、レンコンの表面や穴のなにかについた泥を洗い流し、表面の黒い斑点を丁寧に落とす。この黒い斑点は、二価鉄が浮き出たものであり、これが残っていると傷物になる。

レンコンの集荷場の締め切りは正午であり、10時ごろまでにはレンコンの掘り取りを終わらせる。収穫したレンコンを家に持ち帰り、箱詰めする。1箱に入れるレンコンの重さは4.05kg以上と決められており、サイズと品質によって等級が区分されている。

等級はM（1節が約15cm以上で2～3節のもの）、 M （傷物）、S（1節が約10～15cmで2節以上のもの）、SS（1節が8cm程度）、3S（1節が5cm程度）の5等級である。

気温が高い夏季にはレンコンが痛むのを防ぐため、レンコンを氷とともに発泡スチロールに詰める。冬季にはレンコンが傷つかないように、新聞紙を敷いたダンボールにレンコンを詰める。市場におけるレンコンの取引数は10月ごろから増え、年末に最大になる（第3図）。年末には市場での取引価格も上昇し、レンコン出荷の最盛期を迎える。箱詰め以外にも、SSや3Sといった小ぶりのレンコンや1節しかないレンコンをバック詰めして出荷する。箱詰めが終わると、それらは農協の集荷場へ運ばれる。

農協は運びこまれたレンコンを取りまとめ、各市場向けに仕分けする。日曜日から金曜日までの毎日、首都圏の青果市場へ出荷する。日曜日は市場が休みであるため、その前日の土曜日には出荷しない。2010年には、千葉県内と東京都区内、多摩地区、横浜、湘南の合計11市場にむけて出荷されていた。毎日15



第4図 浅い田と深い田の断面図
資料：現地調査をもとに筆者作成。

時ごろにトラックが集荷場を出発し、収穫した当日にすべての市場へレンコンを出荷することができる。

IV ハス田の環境とレンコンの収穫

1. ハス田の作土層の深さに関する農家の認識

レンコン農家は、作土層の深さによってハス田を「浅い田」と「深い田」の二つに分けている（第4図）。農家の人びとが浅い田と呼ぶハス田は、作土層の深さがおよそ45cmより浅い田である。一方、深い田と呼ばれるハス田は、深さがおよそ65cmより深くなる田である。浅い田では作土層の深さが浅いうえに均一ではないため、ハス田のなかでも場所によって、レンコンの大きさや品質が大きく異なる。一方深い田では、均一な品質のレンコンを確保することができる。

実際には、浅い田と深い田が明確に区別されるわけではない。農家の人びとは、とくにレンコンの生育に適していないハス田を浅い田と呼び、区別している。浅い田では、レンコンが肥大する過程で底の

砂礫層にあたり、表面が傷ついてしまう。傷がついたレンコンは赤く「やけた」状態になり、傷物と判断され、出荷価格が下がる。深い田では、レンコンがハス田の底にあたることなく生育でき、より品質の良いレンコンを収穫することができる。

しかし作土層が深すぎると収穫しにくく、作業効率が低下する。たとえば深さ80cmのハス田では、収穫に従事する人は肩まで水につかり、ウェットスーツのなかに泥水が入ってしまう。すなわち、良質なレンコンの栽培には深い田が望ましいが、深すぎると作業効率が悪くなる。

調査地域では手野町に715枚、田村町に810枚、合計1,525枚のハス田が存在する（第1表）。本稿では、レンコン農家がおよそ45cmの深さを境に浅い田、深い田と呼ぶことにならない、ハス田を作土層の深さ45cm未満と45cm以上の二つに区分する。45cm未満のハス田は、調査した1,525枚の田のうち、55%の835枚であった。45cm以上のハス田は、45%の690枚であった。作土層の深さが45cm未満のハス田は、霞ヶ浦湖岸と田村町にひろがっている（第5図）。

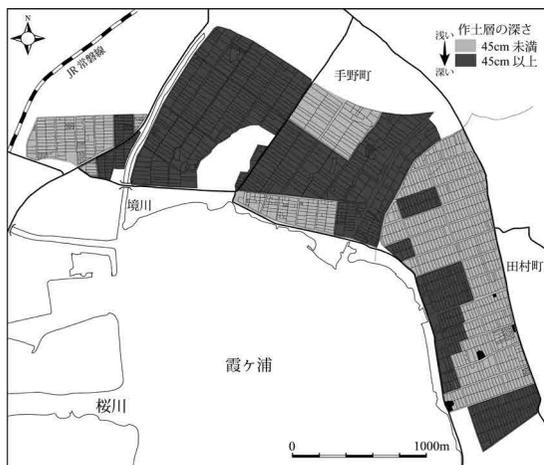
45cm以上のハス田は、手野町に多く分布している。

ハス田の作土層の深さは常に一定ではなく、土壌の流出や肥料の投入などにもなって変化している。農家は肥料を施肥するだけでなく、カラ刈りの際に刈った茎葉や家庭内で排出された生ゴミなどの有機物を積極的に投入する。こうした有機物の投入によって、作土層が維持されるとともに、レンコンが良好に肥大する栄養に富んだ土壌がえられる。その一方で深い田では掘り取りのとき、ポンプの扱いに注意する必要がある。ポンプを長時間同じ場所にあてると、作土が深く掘られてしまうためである。農家は浅すぎず、深すぎないレンコンの生育に適した作土層の深さをつくりだし、維持するよう努めている。

第1表 調査地域における作土層ごとのハス田の枚数
(2010年1月)

	作土層の深さ 45cm未満		作土層の深さ 45cm以上		計	
	枚数	(%)	枚数	(%)	枚数	(%)
手野町	254	17	461	30	715	47
田村町	581	38	229	15	810	53
計	835	55	690	45	1,525	100

資料：現地調査をもとに筆者作成。



第5図 調査対象地域におけるハス田の作土層の深さ
(2010年)

資料：現地調査をもとに筆者作成。

2. 作土層の深さとレンコンの収穫時期

調査地域で年末までに収穫がはじまっているハス田は、全1,525枚のうち手野町では430枚、田村町では363枚であった。ここでは前節で区分した作土層の深さごとに、レンコンの収穫時期を検討する(写真3)。本稿では、レンコンの収穫が本格化する10月ごろから、全盛期となる年末までを対象に、各ハス田の収穫状況を調べた。その結果は以下のとおりである。

2010年10月9日までにレンコンの収穫がはじまっているハス田は、188枚であった。10月10日～10月31日には112枚のハス田で収穫がはじまっている。11月1日～11月13日には126枚、11月14日～11月27日には114枚、11月28日～12月12日には101枚、12月13日～2011年1月3日には152枚のハス田において、それぞれ収穫がはじまっている(第6図)。

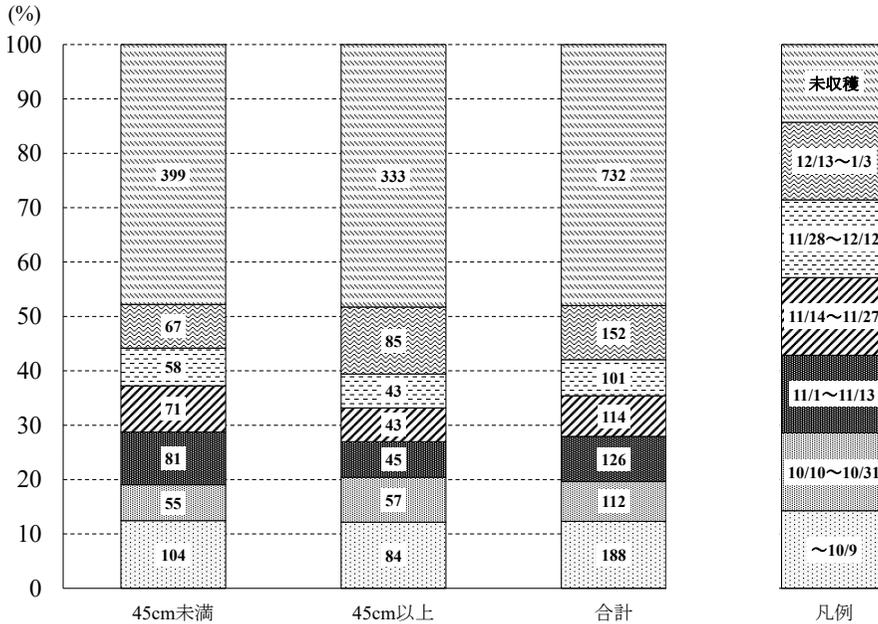
作土層の深さごとにレンコンの収穫状況をみると、収穫時期に違いがあることがわかる。45cm未満のハス田でも、45cm以上のハス田でも、2011年1月3日までに収穫が開始されたハス田の数は約半数である。しかし45cm未満のハス田では、2010年11月1日～11月27日にかけて収穫がはじまったハス田の



写真3 レンコンの収穫がはじまったハス田

収穫中のハス田(写真手前)のわきには、簡易の作業場やポンプが設置される。写真奥のハス田では、まだ収穫がはじまっていないため、ハスの茎葉が残っている。

(2010年10月、筆者撮影)



第6図 作土層の深さごとのレンコンの収穫時期
 注：棒グラフ中の数値は、ハス田の枚数。
 資料：現地調査をもとに筆者作成。

数が増えている。一方、45cm以上の深さのハス田では、2010年12月13日～2011年1月3日に収穫が開始されたハス田の数が急増している。

作土層が45cm未満のハス田では、11月1日～11月13日には1日あたり6.2枚、11月14日～11月27日には5.1枚のペースでレンコンが収穫されている（第2表）。45cm未満のハス田における平均のレンコン収穫のペースは、1日あたり4.1枚である。作土層が浅いハス田では、11月に多くのレンコンが収穫されている。一方、45cm以上のハス田では、年末の12月13日～1月3日に1日あたり3.9枚のペースで収穫がはじめられている。作土層が深いと認識されるハス田では、年末に多くのレンコンが収穫されているといえる。

作土層が浅いハス田では、レンコンが肥大する過程で表面に傷がつきやすく、大きく肥大する前にレンコンを収穫してしまう傾向にある。ハス田の底にレンコンがあたって傷物になる前に収穫するのであ

第2表 1日あたりの収穫をおこなうハス田の枚数

	45cm 未満 (枚/日)	45cm 以上 (枚/日)
~10/9	—	—
10/10~10/31	2.5	2.6
11/1~11/13	6.2	3.5
11/14~11/27	5.1	3.1
11/28~12/12	3.9	2.9
12/13~1/3	3.0	3.9
平均	4.1	3.2

資料：現地調査の結果をもとに筆者作成。

る。年末には1年のなかで最大の需要が見込まれ、大きくて形がよく、傷がついていない立派なレンコンを出荷する必要がある。それゆえ年末には、作土層が深い45cm以上のハス田でレンコンを収穫することが多い。繁忙期に作業しやすい深さのハス田で収穫することで、効率を高めることも理由として考えられる。

2011年の年始の時点では、約半数のハス田におい

てレンコンの収穫がはじまっていない。翌年の種バスとして、良質なレンコンを残しておく必要があるためである。また12月中旬以降の年末を除けば、レンコンは1年を通してコンスタントに取引されている。レンコンの取引価格は、端境期の5～7月に高くなる。農家は年始以降にも、レンコンを出荷できるようにしている。

V おわりに

レンコン農家はよく、「レンコンは種バスを植えつけ、施肥だけすればだれでも育てることができる」と説明する。この言葉は、ハス田とレンコン、市場における取引価格や需要の変動に対する知識、そしてレンコン収穫と作業効率をめぐる経験の集積といった、多くの知識や経験があるからこそ語られるものである。土浦市の農家の人びとが霞ヶ浦湖岸の環境特性を認識し、レンコン栽培の技術を確立し、発展させ先導してきた経験知を裏づける言質である。

本稿ではレンコン農家の栽培技術を検討し、農家が作土層の深さからハス田の環境を認識し、収穫戦略に生かしていることを明らかにしてきた。浅い田と深い田の境となる深さは、およそ45cmである。しかし農家の人びとは、明確に45cmを基準として、ハス田の環境を認識するわけではない。レンコンを栽培するなかで、レンコンの表面に傷がつきやすいハス田を浅い田と呼ぶ。一方、良質なレンコンを収穫できるが、作業しにくいハス田を深い田と認識している。

レンコンの需要は年末に急増し、市場価格も上昇する。レンコン農家は、市場の動きにあわせてレンコンを出荷する必要がある。とくに正月のおせち料理には、良質なレンコンが求められる。農家は、市場で求められる良質なレンコンを適切な時期に供給

できるように、ハス田の環境に応じて収穫時期を調整している。傷がつきやすい浅い田では、傷がつかずに高値で取引されるよう、早めに収穫し出荷している。深い田では収穫作業に手間がかかるが、傷のない大きくて形が整った良質なレンコンを収穫することができる。

大きくて傷の少ない良質なレンコンは、年末に出荷される以外に種バスとして利用されている。レンコン農家は日々の農作業のなかで、作土層の深さを把握し、1枚1枚のハス田を区別している。それにより、それぞれのハス田から収穫できるレンコンの形や質を把握し、適切な時期にレンコンを収穫することができるのである。

霞ヶ浦湖岸には、イネの栽培に適さない強湿田がひろがっている。1970年の米の減反政策を機に、強湿田に適したレンコンが有力な転作作物として各農家にひろまった。こうしたレンコンの生育に適した環境と首都圏の市場と近距離であることがあいまって、土浦市は日本最大のレンコン栽培地に発展した(元木, 1981, 田野, 1983)。本稿ではこれらに加えて、土浦市がレンコンの一大栽培地として維持されているのは、個々の農家がハス田とレンコンの特性および、市場や消費者の要求を把握し、ハス田の環境を生かした収穫戦略を展開していることによるものである点を指摘したい。

謝辞

本稿にかかる現地調査に際して、土浦市のレンコン農家、JA土浦の皆様をはじめとする多くの方がたにお世話になった。また京都大学の大山修一先生には、調査について有益なご助言を賜った。ここに記して感謝を申し上げる。

(受付2018年12月7日)

(受理2019年1月15日)

注

- 1) 中国人研修生は、農業研修生として2008年に来日した。2010年には、組合員数が50人の田村レンコン組合では、17人の中国人研修生を受け入れていた。
- 2) 田畑を数えるときには筆（ひつ）を用いる。しかし多くのレンコン農家が、枚（まい）を用いてハス田を数えている。本稿では枚を使用する。

参考文献

- 秋本吉郎校注（1958）：『日本古典文学大系 2 風土記』岩波書店。
- 大矢麻利子編（2009）：『スゴイ！れんこんレシピ』角川SSコミュニケーションズ。
- 阪本祐二（1977）：『ものと人間の文化史 21 蓮』法政大学出版社。
- 沢田英司（2010）：『新特産シリーズレンコン 栽培から加工・販売まで』農山漁村文化協会。
- 総務省統計局ホームページ（2018）：e-stat. <https://www.e-stat.go.jp/>（最終閲覧日：2018年11月27日）
- 田野 宏（1983）：霞ヶ浦沖積低地の土地条件と蓮根生産。地理学評論, 56-1, 17-34.
- 田野 宏（2004）：霞ヶ浦岸低湿地の土地生産条件と蓮根生産の展開。地理誌叢, 45-2, 38-48.
- 土浦市議会事務局編（2009）：『土浦市政概要』土浦市議会事務局。
- 土浦市総務部総務課総務統計係編（2017）：『統計つちうら No. 97 平成29年度版』土浦市総務部総務課総務統計係。
- 手塚 章（1983）：霞ヶ浦湖岸低地における蓮根栽培の展開。地理, 28-5, 32-40.
- 豊田清修（1981）：『ハスの研究』有明書房。
- 独立行政法人農畜産業振興機構ホームページ, 野菜情報総合把握システム, ベジ探 <https://vegetan.alic.go.jp/index.html>（最終閲覧日：2018年12月2日）
- 広田純一（1999）：戦後の水田経営形態の変化と圃場整備方式の展開。農業土木学会誌, 67-9, 963-968.
- 三浦功大（2004）：『蓮への招待—邀至荷界』西田書店。
- 南川勝次（1963）：食用蓮に関する研究。佐賀県農業試験場研究報告, 4, 1-73.
- 南川勝次（2004）：レンコン。農山漁村文化協会編『野菜園芸大百科 第2版 13 サトイモ・ナガイモ・レンコン・ウド・フキ・ミョウガ』農山漁村文化協会, 229-266.
- 元木 靖（1981）：蓮根栽培地域考—霞ヶ浦湖岸低地の事例に即して。埼玉大学紀要（社会科学編）, 29, 15-37.

Lotus Rhizome Cultivation in Tsuchiura City, Ibaraki Prefecture, Japan: Focusing on Ecological Knowledges of Farmers and Harvest Time of Lotus Rhizome

HARA Masaya*

[Keywords] 1 Lotus rhizome 2 Plowed soil layer 3 Cultivation technique
4 Lake Kasumigaura 5 Tsuchiura city

* Risscho University.